

吉田研一，池田純一郎，堀由美子，和田直樹，森井英一
(大阪大学医学部附属病院病理部)

【症例】33歳 男性

【臨床経過】

2006年に左右腎結石に対してESWLを5回施行され、その際に左腎嚢胞と嚢胞壁の石灰化を指摘された。2011年9月にCT施行し、左腎盂に1cm大の結石を指摘されたが、嚢胞と嚢胞壁の石灰化は以前と著変は認めず。10月エコーにて嚢胞の一部に充実成分を認めた。2011年10月に造影CT、12月に造影MRI施行し、いずれにおいても腎腫瘍が疑われ、2012年3月に腹腔鏡下腎摘出。

【肉眼像】

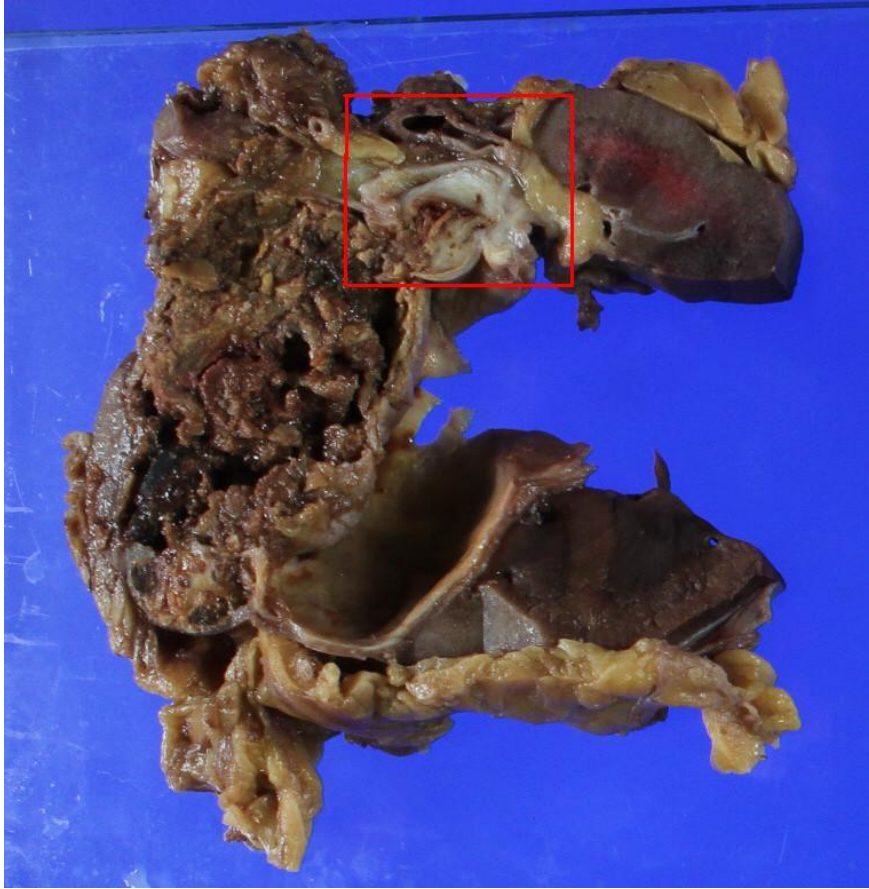
肉眼的には多嚢胞性病変であった。一部の嚢胞は石灰化を伴う被膜を有し、内部に茶褐色顆粒状物質や白色調腫瘤を認めた。

【組織像】

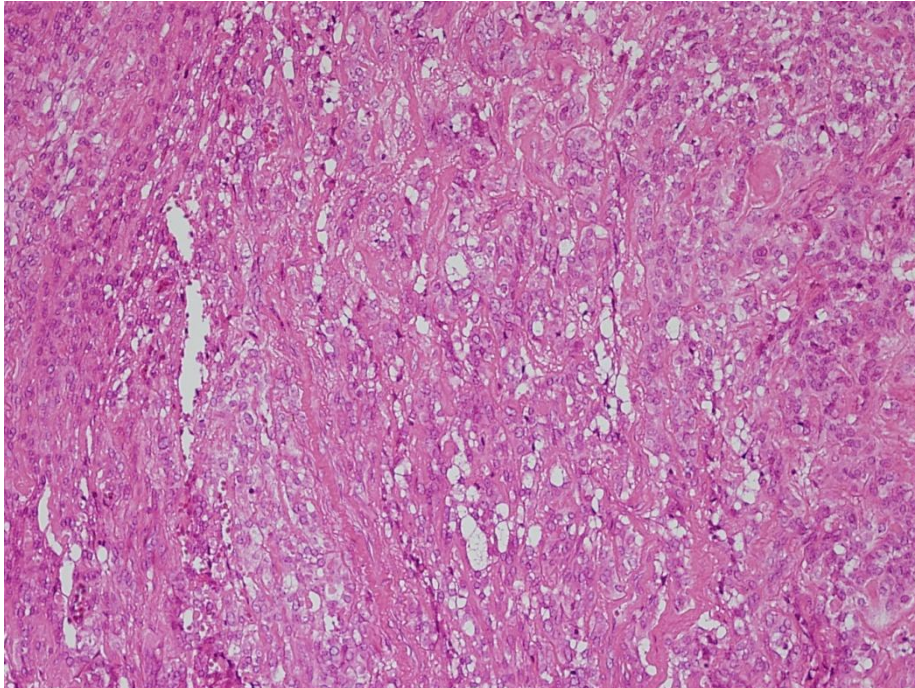
豊富な毛細血管を背景に、やや淡明あるいは好酸性の細胞質を持ち、類円形核を有する細胞が、敷石状、胞巣状、索状配列を示し増生していた。細胞の異型度は弱く、低悪性度腫瘍が考えられた。

【疑問点】

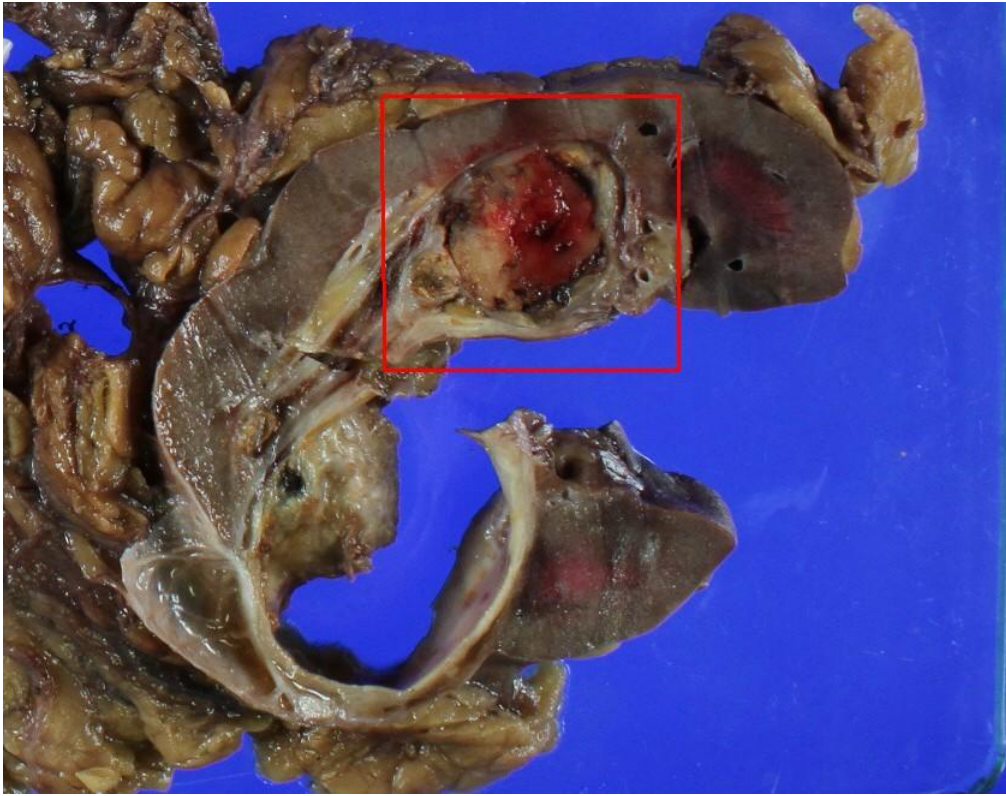
組織診断



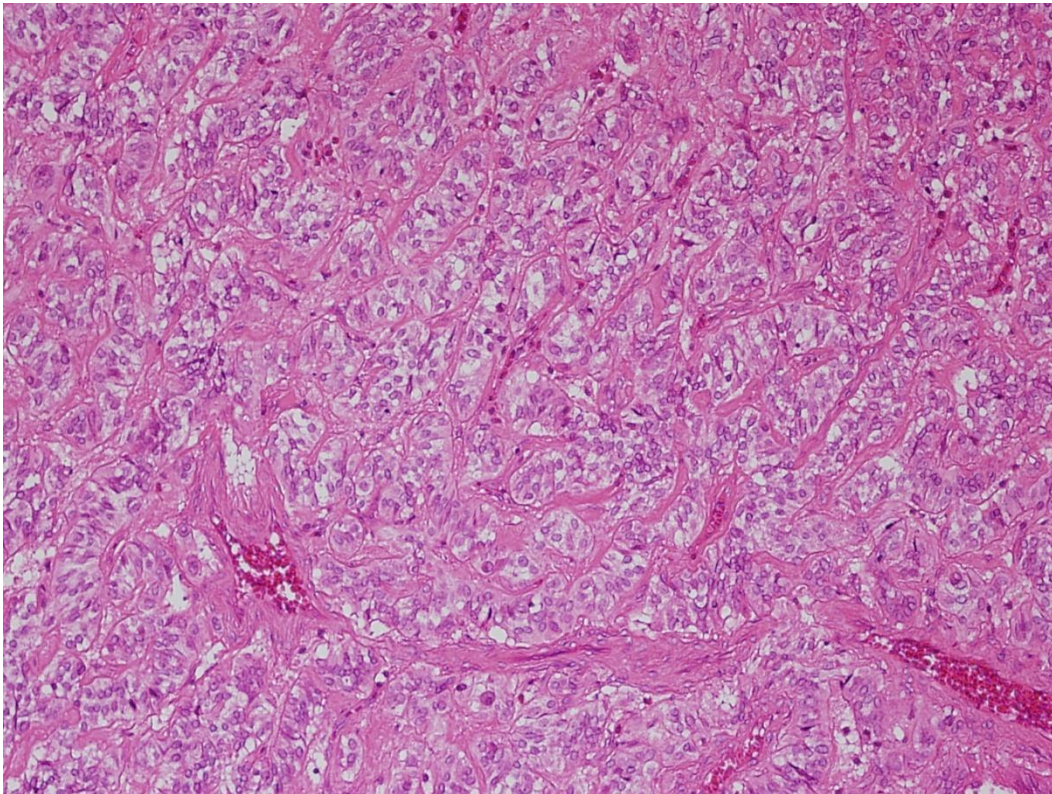
1-macro



1-micro



2-macro



2-micro